

各関係機関長 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所長
(公 印 省 略)

令和 6 年度農作物病害虫発生予察情報について

令和 6 年度農作物病害虫発生予報第 14 号を発表したので送付します。

令和 6 年度農作物病害虫発生予報第 14 号

令和 7 年 2 月 3 日
徳 島 県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1 月第 6 半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 17.4%、発病度が 0.9)。
- (2) 高松地方气象台が 1 月 30 日に発表した 1 か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (2) 多湿環境は発病を著しく助長するので、施設内が過湿にならないよう十分に換気を行う。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に、下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行う。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1 月第 6 半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 4.8%、発病葉率が 0.5%)。
- (2) 高松地方气象台が 1 月 30 日に発表した 1 か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が 20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1 月第 6 半旬の巡回調査では、発生圃場率が 14.3%、発病度が 0.6 と、平年(1.7%、0.1)に比べてやや高い。
- (2) 高松地方气象台が 1 月 30 日に発表した 1 か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 病斑は主に葉裏に形成されるので、葉液は葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(主にタバココナジラミ) (令和 6 年 11 月 5 日付けで注意報発令中)

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年よりやや多い)、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 1 月第 6 半旬の巡回調査では、発生圃場率が 100%、寄生葉率が 16.6%と、平年(57.7%、5.5%)に比べて高い。
- (2) 高松地方气象台が 1 月 30 日に発表した 1 か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1 月第 6 半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 7.1%、発病果率が 0.2%)。
- (2) 高松地方气象台が 1 月 30 日に発表した 1 か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が 20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続

いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないよう注意する。

- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病葉率が0.2%と、平年(1.4%、0.0%)に比べてやや高い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年より少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病葉率が1.2%と、平年(47.4%、6.3%)に比べてやや低い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないよう注意する。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。なお、本県ではSDHI剤のボスカリド剤及びペンチオピラド剤で耐性菌が確認されている。

黒枯病

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病度が1.6と、平年(3.3%、0.0)に比べて高い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

- (2)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3)肥料切れや窒素過多などは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (4)多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が4.3%、寄生葉率が0.1%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.2%と、平年(34.5%、1.6%)に比べてやや低い。また、果実では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が4.8%、被害果率が0.1%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の薬液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類(主にタバココナジラミ) (令和6年11月5日付けで注意報発令中)

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が100%と、平年(63.1%)に比べて高く、寄生葉率が13.5%と、平年(9.6%)に比べてやや高い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の薬液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系の統薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が3.1%、寄生葉率が0.2%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の薬液が付着するように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が33.3%と、平年(33.1%)並の発生であるが、発病葉率は8.3%と、平年(4.9%)に比べてやや高い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。薬剤散布は、葉裏を重点的に行う。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が11.1%と、平年(37.1%)に比べてやや低く、発病葉率は0.4%と、平年(3.2%)に比べて低い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が11.1%と、平年(31.3%)に比べてやや低く、発病葉率は0.1%と、平年(2.8%)に比べて低い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間は

ほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 肥料切れや窒素過多などは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。なお、本県では、アゾキシストロビン剤、ボスカリド剤、ジェトフェンカルブ・プロシミドン剤に対する耐性菌が確認されている。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が3.3%、寄生葉率が0.1%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏や芯芽に寄生しているので、葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が11.1%、寄生葉率が0.6%、被害果率が0.0%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が11.1%、寄生葉率が0.2%と、平年(7.8%、0.3%)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の葉液が付着するよう丁寧に散布する。

(3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

春夏ニンジン

斑点細菌病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が1.2%、発病株率が0.0%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 天候急変等により換気が遅れ、トンネル内の温湿度が急上昇すると蔓延しやすい。

冬レタス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発病圃場率が10.0%、発病株率が0.4%と、平年(23.1%、0.8%)に比べてやや低い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場の排水をよくする。また、トンネル内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 収穫期には株元が繁茂して過湿となるので、発生しやすい。
- (3) 発病株は伝染源になるので、できるだけ早く処分する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

菌核病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発病圃場率が30.0%、発病株率が0.6%と、平年(49.4%、2.7%)に比べてやや低い。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) トンネル内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病株を放置しておくとな多数の菌核を形成して伝染源になるので、できるだけ早く処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ホウレンソウ

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が6.1%、発病度が0.3%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本県では、本病原菌レース1～13まで確認されているため、品種はレース1～13に抵抗性があるものを利用する。
- (2) 抵抗性品種でも突然発生することがあるので、発病好適時の栽培では、薬剤の予防散布を行う。
- (3) 平均気温が8～18℃で曇雨天が続くと、多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 罹病株を圃場に放置すると伝染源になるので、発病株は見つけ次第抜き取って速やかに処分する。
- (5) 葉が繁茂して軟弱になると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発病圃場率が18.2%、1株当たり寄生虫数が0.0頭と、平年(30.0%、0.1頭)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が2.9%、発病果率が0.0%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が4.4%、発病葉率が0.2%)。また、果実においても、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が3.0%、発病果率が0.1%)。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、発生には中間的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し、葉裏にも葉液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、寄生株率が4.0%と、平年(26.2%、4.6%)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 葉裏や芯芽に寄生しているので、葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が33.3%と、平年(57.9%)に比べてやや低い、寄生葉率は11.0%と、平年(9.6%)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 葉裏にも十分な量の葉液が付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 1月第6半旬の巡回調査では、発生圃場率が25.0%と、平年(8.2%)に比べてやや高い、寄生花率は0.6%と、平年(0.2%)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が1月30日に発表した1か月予報では、気温は平年より低く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、特に期間の前半は気温がかなり低くなると予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

II. その他

1. 朝夕の冷え込みが厳しくなる時期なので、施設内の換気は、内部温度が急激に下がらないよう適切に行い、夕方は早めに閉め込む。また、暖房機の点検を励行し、作目に応じた適正な温度管理を行う。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないよう注意する。

発生量の表示

発生程度：甚＞多＞中＞少＞無

発生量：多い＞やや多い＞並＞やや少ない＞少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

URL： <https://www.pref.tokushima.lg.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

○ 病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。